

---

## 絵画専攻

日本画領域

油画領域

版画領域

---

### Painting Course

Japanese Painting

Oil Painting

Printmaking

---

# 井出 夏美

IDE, Natsumi

## 境界を超えてものをつくる

Beyond the Field

何かを表現するにはその表現手法を選択する必要性について理解する必要がある。理解を深めることによって表現された「何か」がより奥行きを持つだろう。

この三つの連作は、どこか違う場所のものでありながら少しずつつながりを持って形のデジャブを促すことを最初に着想したものであった。次第に一つ一つの図柄に

それぞれの特性を生かした表現、モチーフに対してのイメージを持たせることに思い至った。蝶は軽く、描写の生き生きとした筆致を残す形となり、鳥は胡粉の雪を散らすことによって遠い演出を生み出した。山は支持体である朱紙の均一で美しい色彩を生かすことによって陽光を受ける熱い山を表した。



蝶のように軽く・鳥のように遠く・山のように熱く / Light as a butterfly, Distant as a bird, hot as a mountain

インク、胡粉、箔 / 金閣紙、朱紙

Ink, whiting and metal leaf on paper

60 × 110 cm / 3枚



## 出田 瑞季

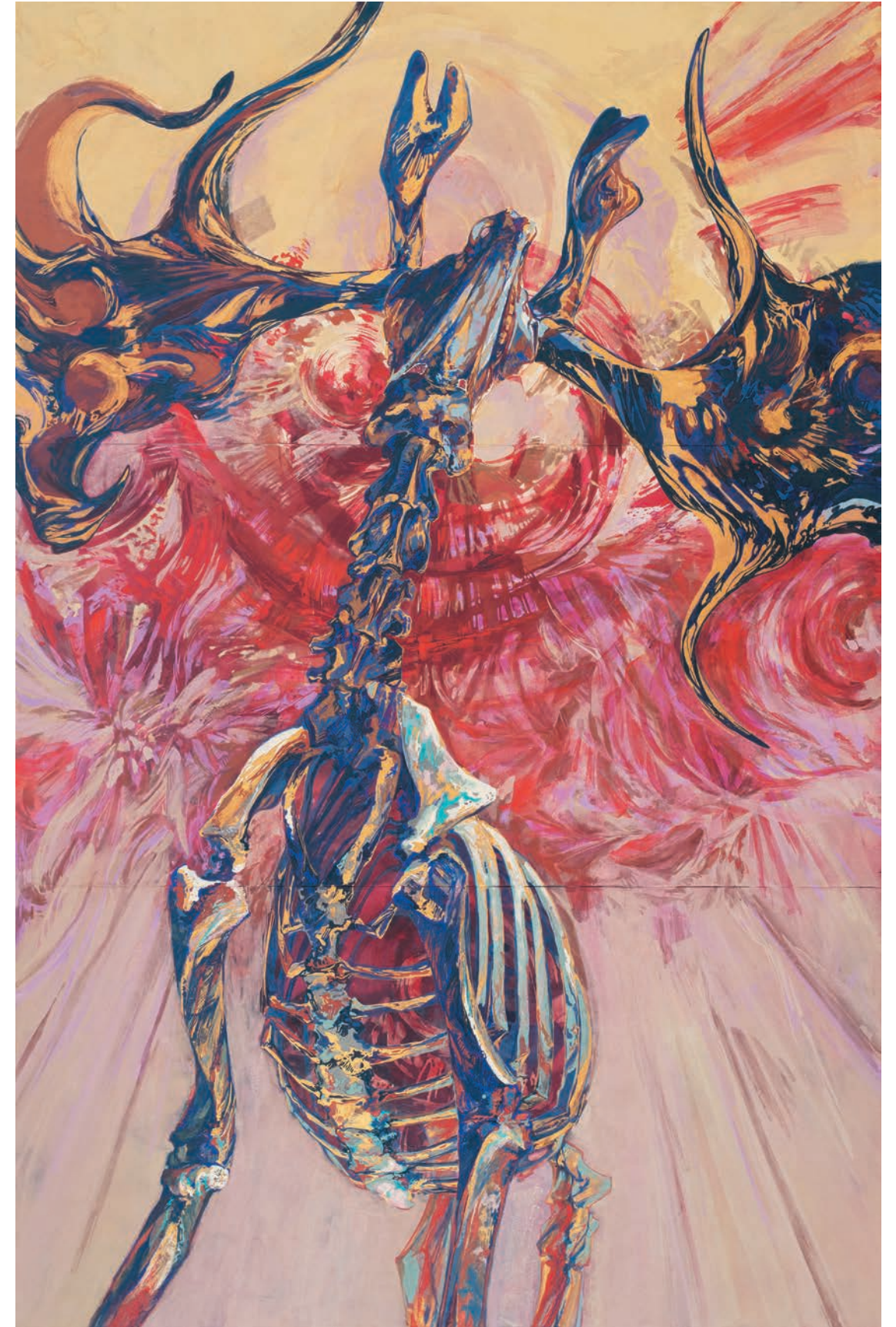
IDETA, Mizuki

### 死と生と骨

Death, Life, and Bones

骨とは、生命が生きていたことの証拠である。その主であった個体が死を迎え、肉体が朽ち果てたあとも、命が存在していたと今を生きる者たちに伝える物証である。

いつか、私の描いてきた作品たちが、私の骨となり、後を生きる者たちの目に触れることを願っている。



死の王 / King of Death

岩絵具、水干、金属粉 / 和紙 / Mineral pigments, metal powder on Japanese paper / 240 × 160 cm



## 小瀬 真由子

OSE, Mayuko

### 不安のその先

Beyond Anxiety

夢で見た光景と幼い頃の思い出は時間が経つにつれて混じり合い、どこからどこまでが現実の記憶なのか分からなくなる。おぼろげな記憶は常に懐かしく、不気味に感じられる。

顔のない子供たちや、細部を省いて描く動物たちには精神的な欠落感や劣等感、喪失感や怯えを込めている。近作

では2人以上の人物（または人物と動物）が登場することが多くなった。それはより客観的に全ての「不安」と向き合おうとしているからだと言える。

人間の「不安」への普遍的な恐れを描きたい。そして、その先に希望を見出したいと思っている。



ヘビ狩り / Snake Hunting  
岩絵具 / 高知麻紙  
Mineral pigments on Japanese paper  
180 × 360 cm



# 小林 明日香

KOBAYASHI, Asuka

## 平面作品における揺らぎの表現

Expression of Fluctuation in Flat Work



学部在籍時より水や光の反射や動きに興味を持ち、モチーフとして制作している。そして、それらのほとんどは日常生活の中で見つけたものばかりだ。都心を流れる川は大抵緑色に濁っているが、代わりに周囲の風景をよく映してくれる。駅には金属で出来た柱や鉄板のような部品が多く、電車と利用客たちの通り過ぎる姿が映り込む。

大学院でもこれらを研究の対象として制作を続けていくう

ちに技法以外の表現にも興味を持つようになった。支持体であるパネルや展示空間も利用した全てで、自分がモチーフを見た瞬間の感動や空気感さえも伝えたいと考えるようになった。

現段階では一作品での空間表現の研究にとどまっているが、個展、グループ展など会場全体での魅せ方についても研究を広げ考察していきたい。



ENTRANCE
 岩絵具、墨、箔、オイルパステル / 和紙 / Mineral pigments, sumi, metal leaf, and oil pastel on Japanese paper
 275 × 110 cm / 128 × 40 cm / 275 × 110 cm



# 史 子涵

SHI Zihan

## 秩序から生まれる感情の模索とその表現

The Exploration and Expression of Emotions Arising from Order



届けるⅠ / DeliverableⅠ

墨、水干絵具 / 雲肌麻紙

Sumi and dyed mud pigments on Japanese paper

97 × 194 cm

届けるⅡ / DeliverableⅡ

墨、水干絵具 / 雲肌麻紙

Sumi and dyed mud pigments on Japanese paper

97 × 194 cm



# 新堀 菜生

SHINBORI, Nao

## アニミズムの感覚の共有

Sharing a Sense of Animism

無数の命が集まり形成されたひとつの大きな塊には、大きなエネルギーが渦巻き、遥か長い時間のなかを絶えず活動をしてきた。そのさまを、海洋生物に託し、人々が自然や動物から感じ取ってきた生命の大きなエネルギーの存在

とその動きと、それに対して抱いてきた畏れの感情を鑑賞者と共有したいと思い、自然物を素材とする日本画の画材を用い制作している。



whirlpool (部分)



whirlpool (部分)



whirlpool  
岩絵具、水干絵具 / 麻布  
Mineral pigments and dyed mud pigments on linen  
260 × 200 cm

# 鈴木 琢未

SUZUKI, Takumi

## 私とは何か

What am I

私という存在の定義はどこか曖昧で且つ、取り止めがない。アイデンティティーの意味に照らせば、個人の帰属意識になるが、「私とは何か」を創作テーマに設けるのならば、もっと別の視点が必要だろうと思った。私は大学卒業後の行く末を巡り、様々な不安や葛藤があった。大した結果を出すことなく、6年間にも及ぶ学生生活を終える。結論から言うと、何も変わらなかった。今冷静に振り返れば、私は何が好き

で、何に興味関心があるのかとすることに向き合なかった。その結果、やること、なすこと全てが停滞してしまった感じは否めない。駄作を幾度も生み出し、たくさん絵を捨てた。とりあえず制作に懸命に打ち込めば、何かが変わると考えていた時期もあったが、状況は良くならなかった。こうしたことから、最後は今の私の等身大の有様と真摯に向き合い、情けなさを実感に素直な表現を試みた。



Doll

岩絵具、アクリル絵具 / 綿布

Mineral pigments and acrylic on cotton cloth

130 × 194 cm

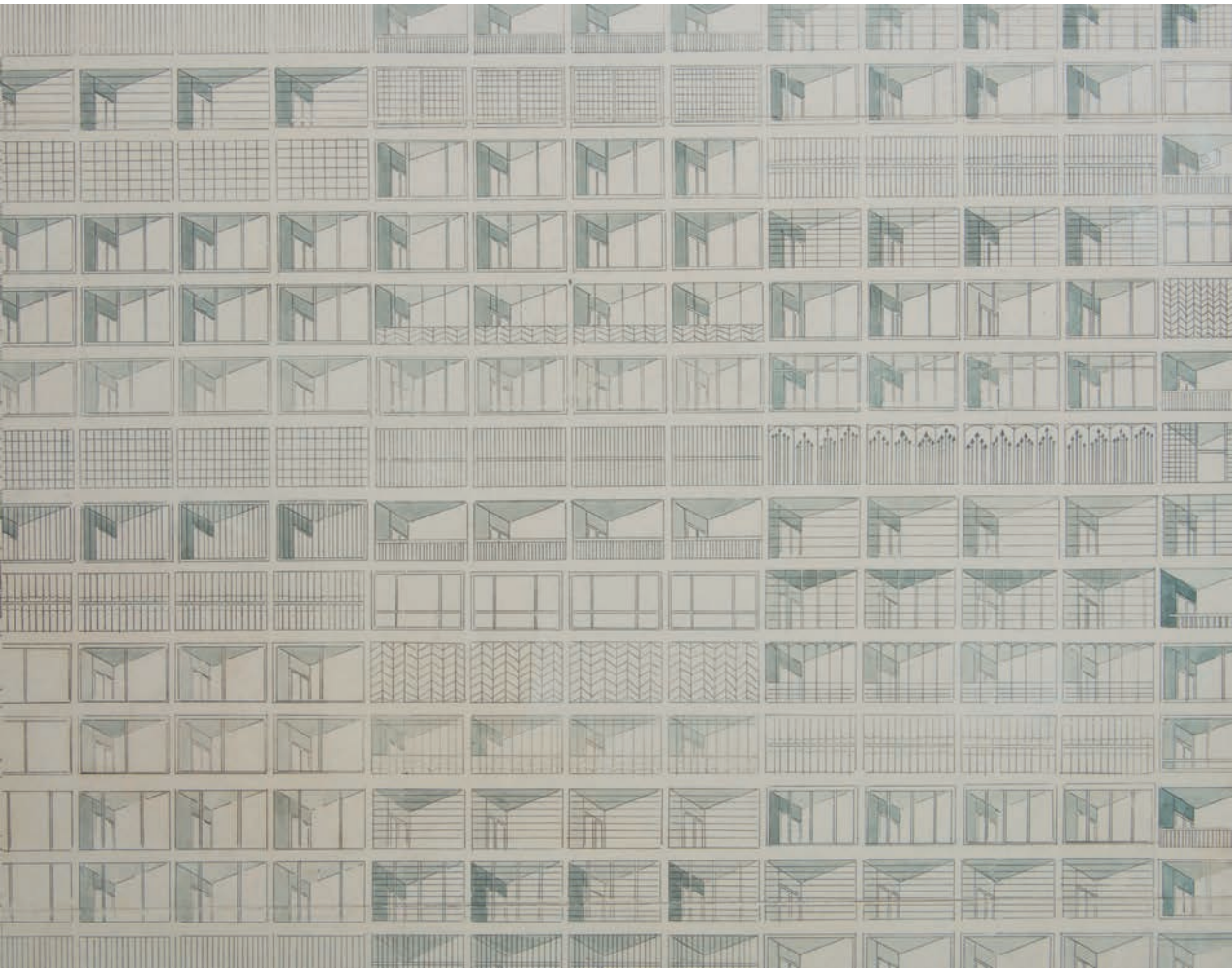


# 張 静雯

CHANG, Ching-Wen

## 「無音の風景」の空間表現について分析と表現考察

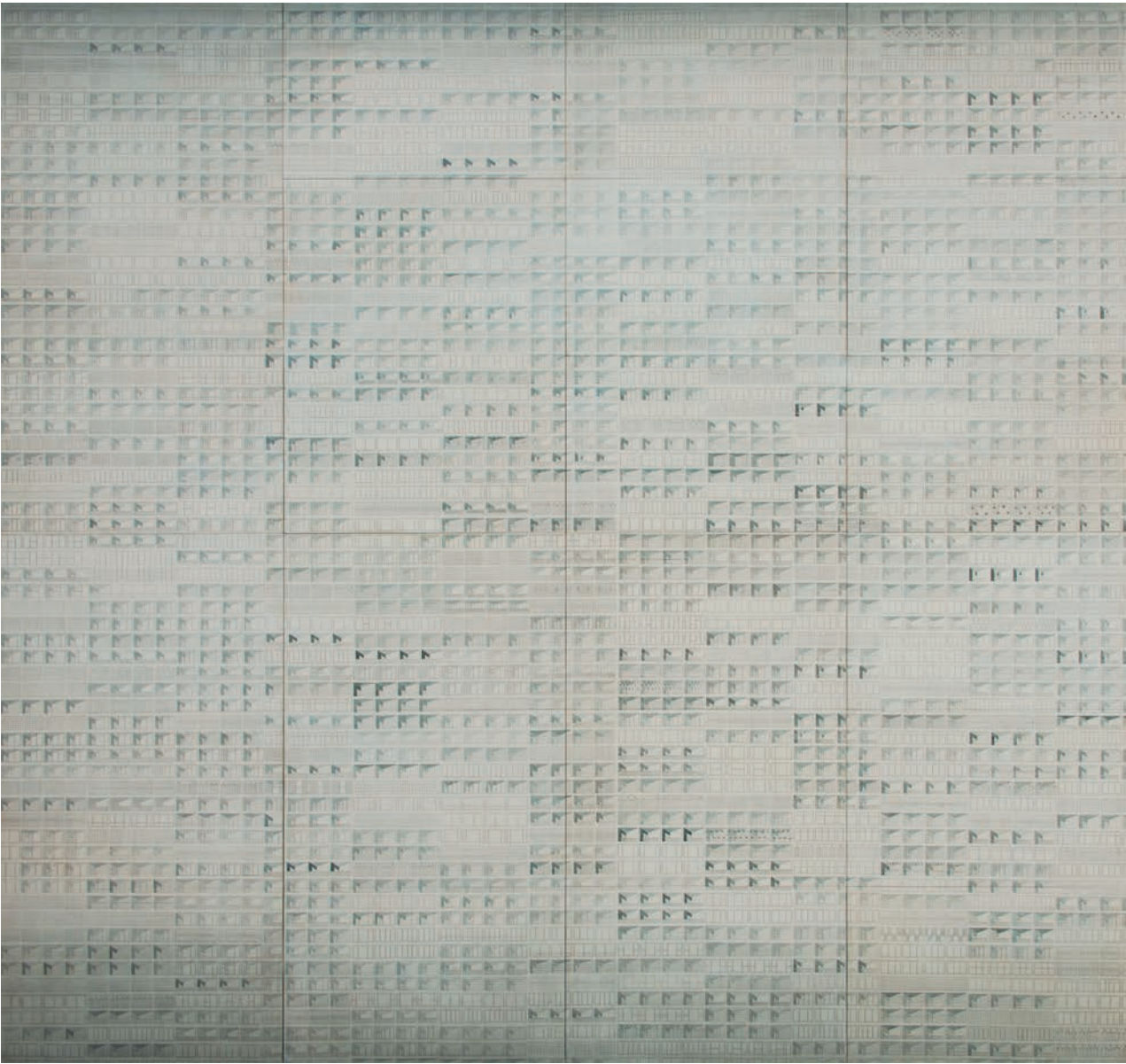
Silent Scenery-Analysis and Representation of Space



容器 / Container  
墨 / 美濃紙 / Sumi on Japanese paper / 336 × 390 × 6 cm

私は都市に暮らす人々の日常生活に着目し、「無音の風景」というテーマで創作をしている。都会の暮らしの中に、人間の孤独、不安、記憶という感情が見え隠れする。無機質な都会の風景を輪郭線を多用して日本画で表現するというものである。私の作品は都市を描写している。「空間」は作品を制作する上で重要な表現要素であり、空間を捉らえる際に光の明暗ではなく、輪郭線に注目し、平面的に表現しようと

常に試みている。日本美術の独特な表現の一つに「平面性」が挙げられるが、反対に近代西洋の空間表現は二次元的なものである絵画の中で、その平面は仮想的に表現された三次元空間のことも表現していることがある。これに対して日本美術は仮想的な空間の考え方がない。この「平面性」について、私はさらに深く探求したいと思っている。





# 中嶋 弘樹

NAKAJIMA, Hiroki

## 日本における動物絵画表現の変遷

Changes in Animal Painting Expressions in Japan



Landscape Immersion “flamma”  
 岩絵具、墨、金属泥、箔 / 絹 / Mineral pigments, sumi, metal powder and silver leaf on silk / 212.5 × 381.4 × 2 cm

自身の制作において、動物を題材として描いている。主な取材場所として、各地の動物園などに赴いて取材を行っている。動物園での動物達の取材から自身の作品に反映させる時のテーマとして「ランドスケープ・イマージョン」という言葉が挙げられる。この言葉は動物園での展示に使われる手法であり、動物達が本来生息している環境・風景を園内に再現させ、観客をその空間に没入させる意味を持つ。

取材を通し、本来は野生として生きていた動物たちが、人間が作り上げた景観の中で、人と共に生きるからこそ見える、見せる美しさも存在すると私は感じた。

人間の作り上げた人工環境と動物の調和を目指して構成された景観、そこでの取材の際に感じたものなどを、自身のフィルターを通し、作品に昇華することを制作の主目的として捉えている。





# 長谷川 葉月

HASEGAWA, Haduki

## 皮膚感覚から生じる、意識と無意識のはざま

Imagination of Consciousness and Unconscious Arising from Skin Sensation

ものを取り巻く無形の性質、たたずまいを絵画で表現したいと思っている。大学院の制作では自身の感覚的なイメージ、中でもとりわけ皮膚感覚に注目し制作を行った。

光の温感や空気に対する触覚的な感覚は、私の中で指針のような役割を果たす。そして意識を示す時、その反対には無意識が確かに存在しているのだろう。私はそのはざまにいる。

修了作品は木に生る桃をモチーフに、質感のあたたかさや光の瑞々しさを想い、描いた。

響き合う / Harmony

岩絵具、水干絵具 / 石正紙

Mineral pigments and dyed mud pigments on Japanese paper

162 × 227.3 cm





## 古木 園子

FURUKI, Sonoko

### 身体イメージの変容と自身の思考

The Expansion of My Physical Image and My Consciousness

私は自分という人間の境界を知っているようで知らない、  
というよりそれは周りに起きる刺激の反射として日々感じ  
取っているもので、変化の絶えないものなのだろう。

この身体と意識のブレを掴もうとして私は制作している。

今作品では、身体を包み込む衣服をコピー印刷して切り  
抜き、一度分解した上でそれぞれを繋ぎ合わせることで自分  
自身の存在のブレの定着を試みている。



passage (変形)



passage

インスタレーション、ポリエステル布、コピー用紙、ボタン、ジッパー、ジェルメディウム、ジェッソ、アクリル絵具、岩絵具 / 木材パネル  
Installation, polyester cloth, copy paper, button, zipper, gel medium, gesso, acrylic paint and mineral pigments on wood panel

350 × 150 × 150 cm



## 宮本 京香

MIYAMOTO, Kyoko

### 私が作品制作に影響されたもの

The Inspiration for My Art Works

この作品は、人の縁を業として表したものである。人との繋がり縁を電話機で表し、その業を縁起物の装飾で表した。「縁」とは、人と人の「つながり」でもあるが、仏教では、物事の「原因」を意味する。つまり、人とのつながりには、何かしら物事の原因を与え、私の知らないうちに結果を生んでしまうのである。この作品の背景の装飾は「縁起物」である。「縁起」とは、仏教で「縁って起こること」を意味する。人は縁起物を自分の側に置く時、「良い縁」があることを願うが、これは「良い原因」が寄ってくることを願うことになる。私たちは「良い原因」がたくさん集まって欲しいと願うが、「原因」の良し悪しとは関係なく、「因」は業を生む。



縁の理 / Karma of relations

アクリル、水干絵具、墨 / アートクロス、パネル

Acrylic, dyed mud pigments and sumi on art cloth and panel

112 × 162 cm



# 森田 緩乃

MORITA, Hirono

## 日本画と漫画の融合

Fusion of Japanese Painting and Manga

1950年代に、手塚治虫がストーリー漫画の基礎を築いてから、漫画は時代の潮流に合わせて拡大を続けてきた。

90年代生まれの私は、漫画が興隆した時代に生まれ、「カードキャプターさくら」（CLAMP 講談社）という漫画に出会った。可愛らしくデフォルメされた絵柄に心惹かれ、そして物語は男女の垣根を超えた恋愛の群像劇の大きな人間愛が、とても肯定的に、物語というユーモアに包まれて描かれていた。漫画が持つ、現実の半歩先を描け、境界やしがらみを自由に超えて行く力は現在でも私の創作の原点である。

漫画のアシスタントを経験後、大学で日本画の技法、日本美術史を学び始めると、「美術」と漫画は一体何が異なるのだろうか疑問が湧いた。日本のアカデミックでは、漫画及び漫画的表現は、評価されない傾向が強いが、私には美術館や銀座の画廊で見る絵画と勝るとも劣らないものとだと感じられたからだ。これが本論の問題定義である。

日本における「美術」の成り立ちを遡るために北澤憲昭氏の「眼の神殿」を参考文献とし、読み解いた。

日本は明治以前には「美術」という言葉がなかった。明治時代、文明開化を受け、日本政府は西洋に文化的先進国と国内外に認めさせるため「美術」という概念を西洋の視覚優位のコンテクストから持ち込んだ。しかし、それは美術の本質には言及しない、あるものは「美術」であり、あるものは「美術」ではないと区別する、「制度としての美術」であった。こうして美術を分類ことで、土佐派、狩野派、四条派、浮世絵派等が「美術」ではないとされた。

「眼の神殿」では、「絵や彫刻というものならばともかく、こと美術に関しては、明治になるまで此の国には古典なるものが存在しなかったということだろう。なぜなら、それまで日本には『美術』という概念が存在しなかったからである。美術なるものが存在しない以上、美術の古典もまた存在しないのである。」と述べているが、この記述は美術の本質を無視した「言葉の暴力性」を孕んだ記述である。

このように、あるものを区別、分類し、劣位に置くことは差別である。これは現代のLGBTをはじめとする性別の問題のように、現代の価値観とは大きな差異がある価値観をマ

ジョリティーだと思考停止し、マイノリティーを差別する構造と同様である。二項対立ではなくグラデーションで捉え、多様性を重視した、個人のアイデンティティーを原点とする性別のように、美術も捉え直すことが可能だと私は考える。

こうした思想的変遷を経て、私は日本画と漫画の融合を試みた。水と油のように二項対立であった両者を、画面の中で同居させることにより、多様性の価値観を尊重した同時代性のある美術表現が可能になると考えた。

手塚治虫は、漫画は「省略・誇張・変形」のデフォルメ表現から始まると述べている。このようなデフォルメ表現が日本の絵画に表出し始めたのはいつか研究を進めると、江戸時代の奇想の画家、曾我蕭白と伊藤若冲にたどり着いた。曾我蕭白の、これまでの伝統絵画に見られないまるでマーカーで引いたような均一な線は蕭白が極めて自覚的にこの表現を選択したことが解る。また、墨によるマットなベタ塗りは現代のスクリーントーンに近い表現である。人物の誇張した表情、筆の硬軟を使い分け対象を抽出するデフォルメ表現なども見られる。

伊藤若冲の「伏見人形図」は極めて簡易的な造形で現代のゆるキャラを彷彿とさせる。他にも擬人化表現や大根を釈迦に見立てる「見立て」表現など、現代のキャラクターの立て方に共通する表現がある。

さらに、漫画には余白を使ってキャラクターの心情を読者に届ける表現があるが、これは少女漫画が興隆した60～70年代の少女漫画が発祥の表現である。少女漫画は恋愛表現や性別越境を繰り返すことが多く、キャラクターの心情を表現するためにコマの途中が点線になり、最後には消えてしまうコマや、白いコマにモノローグのみのコマ、またはコマがなく絵のみのコマ、空白コマ、極端に絵が寄せられ空間の面積が多いコマなど様々な表現が生まれた。しかし、日本美術を遡ると、長谷川等伯の「松林図屏風」を始め、狩野探幽などの空間、余白表現が多く見られる。等伯や探幽は、何も描かれていない部分が地続きになり、絵の空間と感情者の境界が曖昧になり余韻や没入感を促す。このように、日本美術と漫画は、心情を表現する点において境界を越境することを特徴とし、「余白」を必要としたのである。

以上の点から、日本美術と漫画は、同様のDNAが流れていると言うのは一理あるのではないだろうか。そのDNAは今日に至るまで時代の潮流やアニメ、映画、文学などと異種配合を重ね、今日の漫画の形態をとっているのではないだろうか。

多様性から見ることは一見「なんでもあり」になってしまう恐れがある。しかし、特定のジャンルのみで判断、差別する暴力性を肯定することはできない。では一体何で美術的価値を判断するのか。それは今後も考え続けなければならない問題である。しかし、作家が良い作品を作ることは

大前提として、作家や鑑賞者が安易な格付けに依存したり、世代間ギャップなどの一言で思考停止せずに、常に価値観やリテラシーを更新し、見直し、作品の本質を丁寧に見ようとすること。そしてそれが可能な構造をつくること。それが第一歩ではないかと思う。

卒業制作では、言葉に縛られた世界に生きる我々をアンドロイドに例え、それでもなお「ほんとうのこと」を自らの意思で選び取ろうとする姿を、漫画と日本画を融合させた技法で表現し、多様性に満ちた世界を画面上に表した。



THE CATCHER IN THE RYE II

箔、岩絵具、水干絵具、墨 / 吉祥麻紙、典具帖紙

Metals, mineral pigments, dyed mud pigments and sumi on Japanese paper and Tengujo-thin paper

142.8 × 227 cm



森田 舞

MORITA, Mai

発見的共感とは何か

About Discovery and Empathy

ground2020

岩絵具、墨、膠、他墨 / 木製パネル、綿布  
Mineral pigments and sumi on wood panel and cotton  
180 × 90 cm / 6枚

意識のかたちをテーマに、その境界で起こっていることをイメージして描いている。点と点を繋ぐように、そこに何ものかの輪郭が現れるのではないか。

